

# 近世王権の墓制とその歴史的脈絡

松原典明

The Tomb System of Early Modern Rulers and Its Historical Context

MATSUBARA Noriaki

日本の近世における「王権」の墓制についてその歴史的な系譜と展開を示すことを目的とする。特に天皇家、将軍家、大名家に視点を当て、支配者階級における造墓に対する意識が、古墳時代以来改めて「象徴」として意識されたことを、墓の規模、構造、その変遷、宗教、思想などを通して捉えてみたい。具体的には、近世天皇家と将軍家の墓の規模の比較検討をする。将軍家の墓制については、特に将軍が霊廟として祀られるが、その系譜は、中世禅宗における開山堂、昭堂の系譜にあることを類例など確認しながら示した。さらに、将軍を中心とした実質的な権力下にあった構成員である大名の墓制の実態と、造墓の背景となった、思想、宗教、政治的な関係について類例を示しながら紹介した。結論的には、特に近世初期における大名家墓所造営において遺骸を埋葬する場合、朱子『家禮』の葬制に則った埋葬が行われ、後の供養は仏教的な様式に従ったことを指摘した。近世初期大名家墓所造営における儒教受容の一端を先学の研究に導きられながら明らかにした。

キーワード：大名墓 (daimyō tombs)、墓所構造 (tomb structure)、儒教 (Confucius)、  
形象儀礼 (figurative ceremony)、先例 (precedents)

## 1 はじめに

「近世王権」という言葉は近年の日本史研究で漸く定着してきた言葉である。そして、研究者によってその解釈、定義は様々で多義に用いられており、包括的であると同時に大変便利な単語でもある。

先学の定義<sup>(1)</sup>を引用すれば、『平家物語』(四、南都牒状)の「昔唐の会昌天子、軍兵をもて仏法をほろばさし時、清涼山の衆、合戦をいたしてこれをふせく。王権猶かくの如し、何ぞ況んや謀反八逆の輩においてをや」を挙げ文脈より「王権」はすなわち「国王(天子)の権力、王者の権勢、君権」を意味しているとしている。また、頼山陽の次の資料を挙げ「外史氏曰。王権之移於武門、始於平氏、成於源氏、而基之者、藤原氏也」(『日本外史』一、源氏前記、平氏)、「国王(天子)の権力、王者の権勢、君権」と同義であるとして、平氏、源氏、藤原氏という時の人々を示した背景を考えると「時代を支配する者、

集団の権力」として「王権」を定義できるとしている。併せてかかる捉え方から「鎌倉、室町、江戸」の幕府権力もひとつの「王権」とする多元的王権論の視点も、日本の支配者階級の実態とその歴史的脈略を射程とするためには必要不可欠で、「王権」を「王の権力、力」とだけ見るのではなく、「王を王たらしめている構造、制度」の重要なシステム力として総合的に考える必要があることを説いている。

ここでは、この定義に従って「近世王権」を次のように捉えておきたい。天皇と将軍あるいは朝廷と武家政権という二つの王権、あるいは世俗の実質的な権力と観念的、伝統的な権力が並立して存在し、両者があいまった完全な王権（公武結合王権・複合王権<sup>(3)</sup>）が「近世王権」の実態に近いものと捉えている。広義には「時代を支配する者、集団の権力」という定義が最も日本の近世を包括できそうである。かかる定義から、時代を支配した天皇と将軍、そして彼らを支え王たらしめた大名たちについて、彼らが象徴的に造営した墓所を考古学的な視点からとらえて天皇と将軍の王としての意識、そして、それを支えた構造と制度上の構成員として重要不可欠であった家臣としての大名たちの意識を捉えてみたい。墓所は、葬送儀礼の選択、墓所上部、下部の構造の選択が行われた上で造営されることが多い。したがって儀礼と構造を考えることで、執行者の意識の一端が垣間見ることができる。

## 2 近世天皇家の葬儀と儀礼

近世天皇家の葬礼は、承応三（1645）年の後光明天皇葬送儀礼によって位置づけられたとされている。近世最初の天皇の葬送儀礼は、中世末期の正親町上皇の葬送儀礼を先例としながら元和三（1617）年に行なわれた後陽成上皇の葬儀であった。この葬儀では、二代将軍秀忠が参列しなかったが、この時から天皇家の葬礼は幕府の管理の下で執り行われることとなった。将軍参列の視点で天皇家の葬送を振り返ってみると、南北朝期の後円融上皇の葬送儀礼では足利義満が参列し、室町期の後花園法皇葬送儀礼には足利義政が参列していた。このような先例に従えば近世最初の後陽成上皇葬儀において将軍であった秀忠が参列しても不思議ではなかった。しかし敢えて参列しなかった。その理由として、天皇葬送の一切を幕府が管理したことにあり、将軍が参列しないことで幕府が朝廷への立場を示した、とされている。さらに天皇の葬送儀礼は、後孝明天皇の葬送儀礼において火葬を止め、土葬を取り入れたことで大きく変化した。明確な資料的や証左は得ていないが、臨濟禅による供養儀礼をおこない埋葬においては火葬を嫌って家禮による儒葬が執り行われたのではないかと捉えている。このことを裏付けることとして葬儀においては茶毘に必要な火屋を設けるなど火葬の儀礼の準備はするものの火葬

表1 近世天皇陵

天皇名	陵墓名	形式	所在地
後陽成	深草北陵	方形堂	京都市伏見区深草坊町
後水尾	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
明正	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
後光明	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
後西	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
霊元	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
東山	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
中御門	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
桜町	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
桃園	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
後桜町	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
後桃園	月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内
光格	後月輪陵	石造九重塔	京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内

は行わず土葬による埋葬に至っている。いわば仮火葬儀礼といえる。このような類例は同時代的には伊達政宗の葬送<sup>(5)</sup>でも認められる。遺骸に対する死生観や、穢れなど各々の葬送に様々な誘因があり全ての例において同一視は難しく、思想的な部分と関連が大きいのではないかと想定している。秀忠が執行した後陽成天皇の葬儀は、神道によった家康の葬送の影響も無視できないものであったと思われる。

13世紀以降、後堀川天皇以来、泉涌寺で続けられてきた天皇家葬送儀礼における遺体の管理、拾骨、納骨と僧侶による仏教的な葬送は、後光明天皇の葬儀執行から幕府が管理したことで大きく変化（仏教葬→儒葬へ）し、慶応二（1869）年12月孝明天皇の崩御に伴う後月輪御陵への葬送では、柩の蓋石に「後月輪陵、慶応三歳次丁卯月正月丙辰朔二七日壬午葬」と没年と陵名が記され石槨内に納められた。そして三回忌（明治二年）には僧侶が排除され神式で執り行われ、以後神式による葬礼となった<sup>(6)</sup>。明治4年、それまで宮中にあった「お黒戸」が泉涌寺に移され、それ以降、泉涌寺が天皇家の位牌所、菩提寺として今日に至っている。

### 3 将軍墓と近世大名墓所

近世初期の将軍家及び主要な大名墓所は霊廟形式が多い。この霊廟形式は、慶長四（1599）年の京都・阿弥陀峯に建立された豊国廟（図1）を嚆矢として展開するとされているが、江戸に展開した近世大名墓所の構造様式に直接的に影響を与えたのは、家康の葬送と秀忠の霊廟（図2）造営と思われる。

元和二（1616）年、家康は吉田神道の神龍院梵舜によって久能山に葬られ、金地院崇伝、南光坊天海、本多正純らにより、菩提所である江戸増上寺にて葬礼が執り行われ、一年後に東国の鎮守となることの遺命によって日光へ改葬された。

改葬事業及び日光東照宮の造営は幕府直轄の事業として二代秀忠が当たり、父家康を「東照大権現」という神霊として東照社に祀った。そして近世前期の将軍家や大名ではこの家康の葬礼を造営の規範としたといえる。

近世期における大名墓は、17世紀中葉で大きく変化する。その変化について系譜を重視して捉えようと初源的には、豊国廟の造営も含め中世後半から展開する「塔頭」の影響が強い。そして17世紀中葉以降は、鞘堂が消え石柵を巡らす墓所形式が新たに創出される。この新たに創出された墓所構造は、家格による規模の差はあるものの、様式においては画一的に全国に展開し、18世紀の早い段階には今日の我々が墓地で目にする墓所構造の初源的形式としての萌芽があったものとして理解できる。また、各大名が国許において同一の形式を重んじ、代々その様式を踏襲し墓所を造営したこと

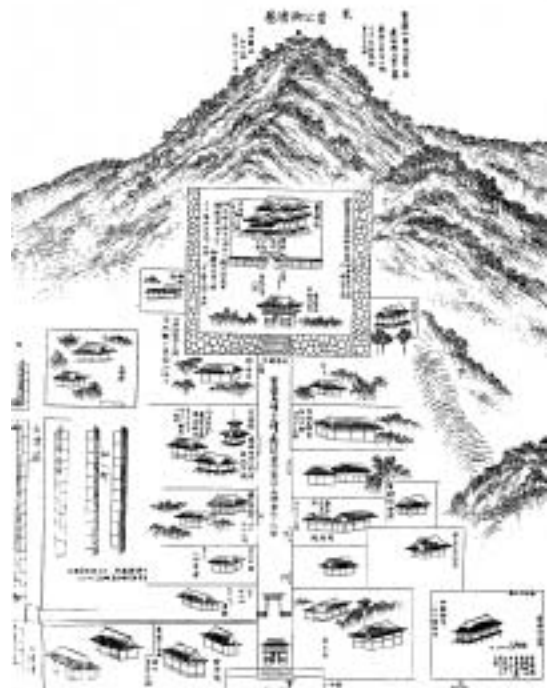


図1 創建期の豊国廟（註23）

は、徳川幕府という近世武家社会が永続的に三百年にわたり続いたことと密接に関連しており、各大名が造営する墓所は、政治的にも社会的にも近世王権成立や王権維持の重要な一要素であったと想定している。そこで、多様な構造から画一的に変化した墓所構造の変遷を再度確認し、現代の墓所構造との系譜を捉えてみたい。

#### 4 近世初期の大家墓所の類型

近世初期における将軍家も含めた大名家の墓所を構造的な視点から分類してみると大きく次の類型（図5，8）にまとめられる。

- ①、秀吉の豊国廟（図1）を嚆矢として、家康，秀忠（図2）以下7代までの将軍家墓所は埋葬のための墓域（葬地）と拝するための権現造平屋霊屋が区分されており、両域を併せて霊廟形式として位置づけられている。
- ②、①の霊屋と墓域が一体となった様式を廟墓形式の墓所として位置づけられている。建物内には位牌が祀られる。類例には伊達正宗の墓所があげられ、中世禅宗開山堂の系譜から創出された塔頭様式の墓所として、郡山筒井順慶，瑞雲院政所，知恩院良正院墓所などがこの様式といえる。近世初期の諸大名の墓所形式はこのタイプが最も一般的であったものと思われる。
- ③、霊屋としての鞘堂がとれた様式で、基壇が特徴的に設えられる。基壇の違いにより壇上積み基壇形式（A・Bタイプ）と一般的な基壇形式（Eタイプ）に区分できる。
- ④、墳墓様式。三段築成と円墳，馬鬣封がある。三段築成には石殿が伴い，円墳，馬鬣封には亀趺碑が伴う。

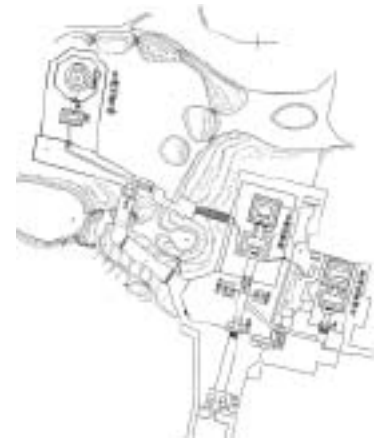


図2 2代将軍秀忠霊廟（註24）



図3 伊達正宗廟墓平面（註25）

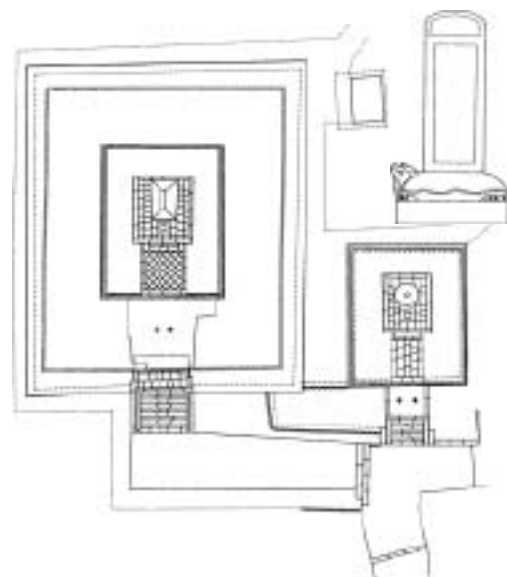


図4 徳川頼房墓所の馬鬣封と亀趺碑（註26）

- ⑤、石廟様式（Cタイプ）に区分出来る。B・Eタイプは、それぞれ後に石柵が施されD・F・Jタイプに変遷する。Cタイプは、「ラントウ」に変遷し、別系統で石殿（Hタイプ）が存在する。

以上みたように、近世初期の大名墓は、拝所と葬地が区分された霊廟形式、一体型の廟墓形式、一体型で基壇が発達したタイプ、上部墓碑を伴わないもの、石製構造物の中に石塔、位牌を祀るなど時系列の変化の中でも様々な様式の墓所が成立するが、その墓所構造を選択する背景には信仰や思想面が大きく反映されている場合が多いことも注意しておく必要がある。その思想や信仰は、王権にもつながり「政」の重要な要素の一つでもあったものと思われ、統治における葬禮の執行と墓所の維持の重要性を現在に示している。

## 5 墓所類型の系譜と年代

近世大名家墓所の構造は、18世紀後半までに間知積基壇と石柵を巡らした共通形式が確立する。

なぜ、このような構造の共通性が生まれ、斉一性が確立するのか、この点に着目して墓所構造を概観してみたい。

特に、成立形式をみると、基壇・基台と石柵の設えが重要要素と思われるため注視したい。

基壇と基台を観察すると次のような分類が出来る。

### I、壇上積基壇

壇上積基壇の腰が高いAタイプと低い伝統的なBタイプ、墓ではないがBタイプに石廟が載るCタイプがある。さらに壇上積基壇の上に基台を据えその上に塔を設置し装飾的な石柵を巡らせているDタイプがある。

壇を設えない場合は、基台を一段あるいは複数重ねその上に塔を据えるEタイプ。Eタイプに石柵が巡るFタイプがあり、さらに明確では

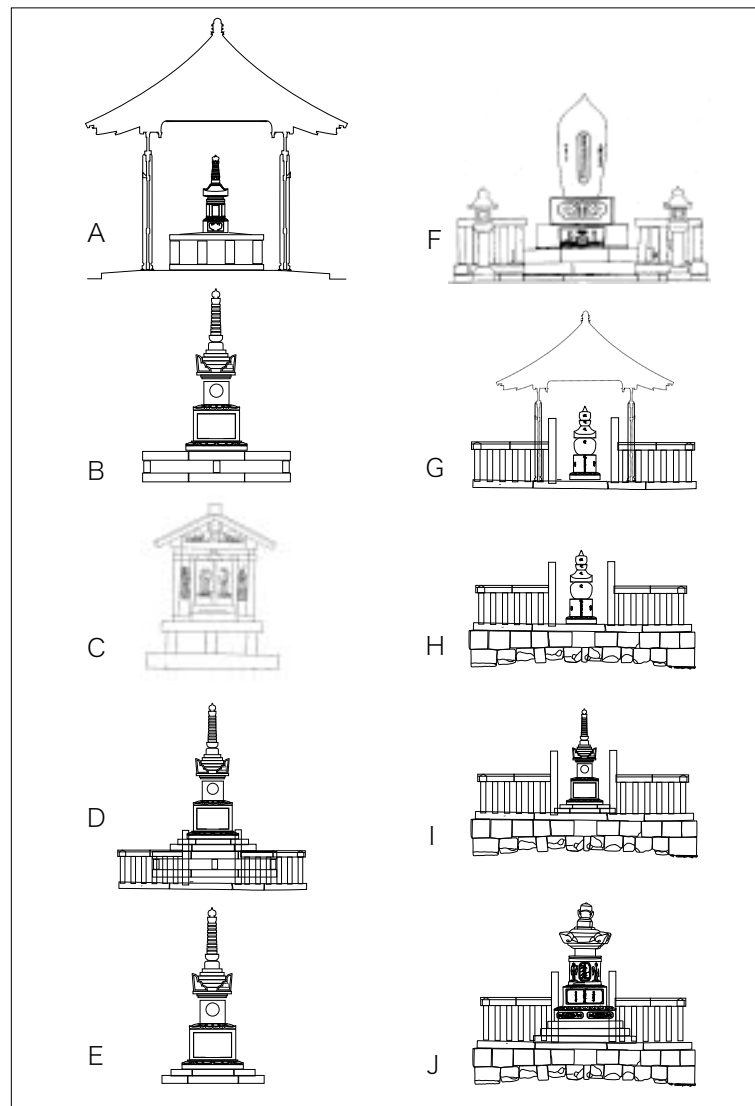


図5 墓所構造と基壇分類



図6 田中吉政塔壇上積基壇の石塔



図7 阿茶の塔基壇積石塔

ないが其の初期にはFに鞘堂が付加されるGタイプの想定が可能である。

## II, 間知積基壇

間知積基壇の類型は、全ての類型に石柵が付される。塔が直接載るHタイプ、間知積基壇上に低い伝統的な壇上積基壇を設えるIタイプ、間知積基壇と基台を組み合わせるJタイプがある。石柵が設えられるのと共に燈籠、花瓶、手水鉢が付属するようになる。これは霊廟建築の模倣といえ、拝するための墓所への変化と捉えられる。

## 6 大名家墓所類型成立の系譜と背景

基壇・基台の特徴と組み合わせからなる10類型について時間的な変遷と系譜を示したのが図7である。

Aタイプは中世禅宗塔頭寺院の開山堂内に石塔が納められる系譜、いわゆる開山堂の系譜からの派生が考えられる<sup>(7)</sup>。その他の種類の墓所形式の特徴は、初期の段階では中世の石塔類（宝塔、宝篋印塔、五輪塔）が16世紀前半代には最も小型化する傾向にあったものが16世紀後半に向けて徐々に大型化へ転じ、慶長期以降大型傾向となると同時に、塔形の石塔が復古される。豊国廟（慶長3（1598）年）は、明治期に再建されたようである。豊国廟＝秀吉の死と葬送は、資料が明確でないために不明な点が多いが、現段階では大名家墓所の初源的な様式を備えた墓所として捉えている。

Cタイプとした石廟形式は、中世末期まで遡ることが指摘されているが、この形式が創生される背景には中国明代の朱子学、儒教における思想の流入が想定でき、祖を祀る家廟、儒学における「孝」の「禮」行為を具現化したものと捉えている。日本禅宗が中国禅、儒教を取り込んだ形が具現化されたもの

近世王権の墓制とその歴史的脈絡（松原）

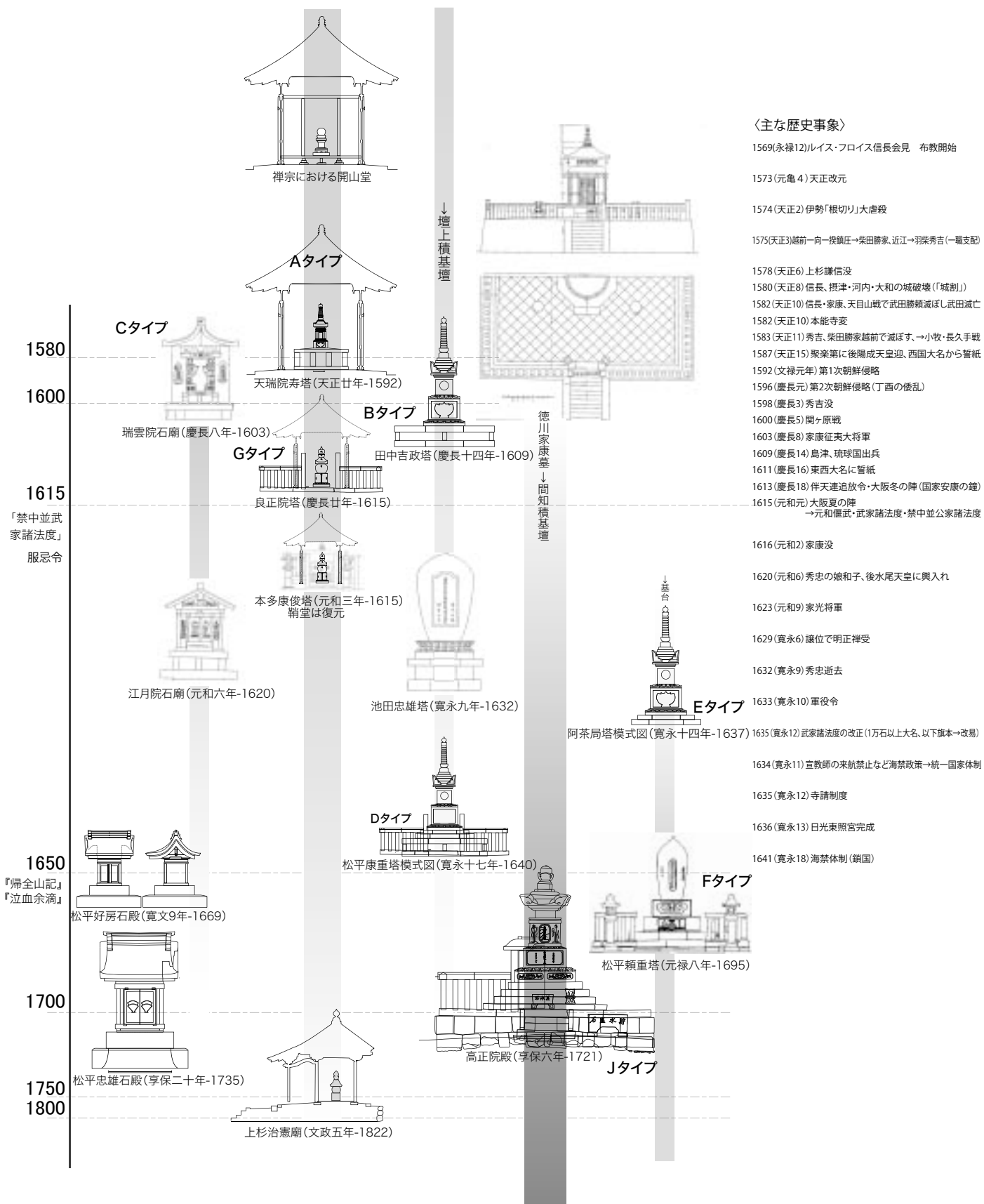


図8 基壇様式変遷図



図9 結城秀康正室，蓮乗院石廟



図10 高野山・結城秀康石廟



図11 愛知県本光寺石殿

と考えている。つまり石廟内には、本来であれば「木主」，「神板」が入るのであるが，日本的展開として，石塔を石廟内に納め「塔」というよりは「塔形式の位牌」を納めたものとして捉えている。現在確認できる石廟形式の分布は，日本海側，あるいは九州の一部の近世墓地（大分県好瓜近世墓地）の初期段階に特徴的に確認できる。曹洞禅の教線拡大と密接に系譜を一にするとと思われる部分もある。そして，日本海側，九州地域に展開した段階には大名墓に限らず民衆階層へ導入され，小型の石廟形式の全国的な普及へと繋がったものと思われる。小型の石廟形式とはいわゆる「ラントウ」<sup>(8)</sup>と位置づけられている形式で，全ての「ラントウ」がとは言えないが，先に示したとおり日本禅宗が中国儒教を取り込んだ形が具現化されたものとして捉えている。

大名墓とは若干ずれるが，近世墓標について触れると，17世紀中葉以降民衆階層に普及する墓形式の内，方柱，駒形，圭頭の初源は，近世前半における林家を中心とした儒教の興隆を背景に，中国以来の「木主」と朱熹が考案した「木主」形式が儒教における始祖を祀る思想を背景に創生された形式であると想定される<sup>(9)</sup>。

京都における墓所形式の変遷の画期は，壇上積基壇Bタイプと基台Eタイプの折衷式（Dタイプ）には石柵が確認できる（17世紀中葉前半）。この背景には，幕府による「諸宗寺院法度」（寛文5-1665年）による慶長・元和以来の宗派の組織化と武家・公家の家格を重視した政策があり，寺檀制度を背景とした庶民階層の寺院境内墓地内への石塔造立の波及が，墓地内における格差をより強く意識するための設えとして造作されたものと思われる。

江戸における大名家墓所を概観すると，紀年銘から慶長7（1602）年の傳通院の塔が最も古くなる。元和2年の家康墓より早い段階で間知積基壇が用いられることに若干違和感を感じる。傳通院の塔は回忌供養で整備されたか，あるいは傳通院の格付けの必要性から基壇が新たに設えられ塔が再び基壇上に据えられた可能性も拭えない。傳通院内にある徳川家光正室孝子（延宝11年-1674没），千姫（寛文6年-1666）をはじめとするFタイプが江戸における大名墓の初段階ではなかろうか。年代的には17世紀第3四半期である。このタイプの出現には2代将軍徳川秀忠廟（寛永9-1632年）造営を契機として戦国期以来の伝統的な靈廟建築を有するAタイプとJタイプ折衷形式が増上寺で創出され家格の高い大名へ浸透したものとする。

都心における大名家墓所は，土地有効利用の点から寺院付属の墓地における改葬が進み江戸期のように



な当初の墓所景観を留めていない場合が多い。御府外であるが池上本門寺では幸いにも他の墓所に比べその景観を今に遺しているため例にとって概観してみたい。本門寺墓所内には、特に法華經に現わされた女性救済の縁からか諸大名家の正室、側室など女性の墓所が主である。造立年代をみると18世紀前半から展開しており、その様式はJタイプの墓所が林立している（徳川家康側室養珠院、紀州藩主徳川頼宣正室瑤林院塔には17世紀代の銘が確認できるがいずれも葬地は別の地であり18世紀前半に顕彰・結縁により祈念的に造立されたものと考えている）。8代将軍吉宗側室本徳院（享保8-1723年）墓所もJタイプであるが、外周を築地塀が巡り傳通院内で確認した徳川秀忠長女千姫（寛文6-1666年）墓所の二重石柵に系譜があると思われる。また、18世紀以降大名家墓所は小型化・形骸化・齊一化しつつ基台部分が省略されたF・Jタイプが主流となる。

以上見てきたように、京都から江戸、そして将軍墓から展開する江戸の大名家墓所構造は、18世紀前半代にはほぼ付属品（花瓶、水盤、燈籠など）まで付加され形式的として画一化したJタイプとして完成したものと思われる。そしてこのJタイプこそ小型化、形骸化しながら我々が今日、日常的に目にし参詣・拝する墓所構造の初源的なタイプであったことが容易に認識できる。

以上のように、中世末期から近世の大名家墓所において成立する共通した墓所構造は、儒教を背景とし拝するための一定の空間確保の必要性から創生され、基壇・基台・石柵はその重要な構成要素とし成立したことを構造の変遷から確認したが、墓所がなぜ齊一的な様式に変化したのかを考えてみたい。

## 7 墓所造営と思想について

中世末期、戦国諸大名は、戦乱の世を乗り切り江戸期を迎えるが、改めて宗族の存在や血族秩序を意識的に高めるようになる。その象徴として具現化させたものが拝殿を有する靈廟形式のあるいは廟墓形式の墓所であったものと思われる。墓所の形成は、一族は勿論のこと家臣を含めた秩序意識を集約させ平穏な安定した政治を行なうための重要な装置であったといえよう。徳川時代、新井白石による『藩翰譜』では万石以上の大名は337家に及んでいる。大名は各地に「家」ごとに墓所を築くが、「葬地」に込められた意味について改めて考えてみたい。

その前提として、将軍家についてみると、徳川家康が天海によって神格化されたこと、家光が自ら家康神格化に支えられつつ徳川家の氏神信仰を中心としたイデオロギーを利用することで全国に幕府許可の東照宮の分祀を行い「一門」をつくり上げようとしたことが指摘されていることも政治思想史的な視点として最重要視点といえよう。

家光政権期における諸大名の東照宮勸請<sup>(11)</sup>は、将軍家との姻戚関係も示しており非常に重要視され私勸請する大名もあったという。つまり、東照宮を勸請することの政治的な意味は大きく、姻戚関係を示し、貴尊な松平名字を授与されることで、外様大名などは姓氏の貴種化を意味していたのであった<sup>(12)</sup>。

将軍を中心として行われた「東照宮参拝」、「御社参」には膨大な人員と費用が投入され「かぎりない大札」という認識で行われていた。これも「先例」に従い、これを継承することで「忠義」や「道」の理にかなう「正統の道理」として行われものであろう。これは天子としての後継を確認、認識させるための重要な相続における最初の「儀式」、「儀礼」といえ、この「儀礼」の存続こそ秩序による統治を可

能にしたものであったといえよう。

「禮」を重視することが江戸初期の諸大名の規範をつくりあげ平穏な世を創り上げていったものと考え<sup>(13)</sup>る。

## 8 大名家墓所と思想背景解明へのアプローチ

「禮」を重視し諸大名が規範をつくりあげるとはどのようなことなのか。自分の存在理由を認識する。つまり、父母があって初めて自分が存在する。父母は祖父母があって存在した。このことが祖烈を敬い祀る信仰の根底にあり、それを「先例」として自らが「禮」を実践することで重要性を民に認識させ規範を築いたものと思われる。相続とかかわる重要な「禮」の実践として葬送の執行と喪礼の実践こそが視覚的に最も強く示せる王権の継承儀礼といえよう。家康の遺言を規範・先例として火葬を嫌って、中国における魂魄思想のもと喪礼が儒葬として実践されたことが、近世以降展開する大名墓の先例となったものと考えている。

続いて既に指摘されている事ではあるが、喪礼を実践した主な大名の葬送儀礼を若干確認してみたい。

特に、江戸初期における大名墓は、独自の思想に基づいて葬送が執り行われている。特に『源義公葬儀目録』<sup>(14)</sup>に詳細に記された尾張徳川家初代義直公の葬礼、そして水戸徳川家二代光圀は、正室の泰姫の葬礼を林羅山夫人順淑孺人の墳墓が馬鬣封であった先例に倣って儒葬した。また、父である水戸徳川家初代頼房の葬儀においても終始『家禮』に従ったことが『慎終日録』に記されている。備前岡山池田家初代光政の葬送は明礼を基本としつつ『家禮』を併せて参照して執り行うという儒教に従った葬送であった。また、会津松平家初代保科正之の葬送は神道によって執り行われていることが葬送記録から明解に指摘されている。光政の祖先祭祀には儒者熊沢蕃山が「祝」を勤めていることが指摘されており重要である<sup>(15)</sup>。この他特に17世紀代における時期は一般民衆においても火葬を嫌い、儒教を背景とした葬送も儒者関係の人々を中心に広まった。日本において神儒仏一致の伝統的思想を否定して儒教興隆をもたらした人物は藤原惺窩であり彼の足跡も近世における大名墓を考察する上では重要といえる。また、林鶯峰による羅山と母荒川亀の葬送、野中兼山による母秋田夫人の葬送など当時の儒葬については、既に近藤啓悟、吾妻重二によって詳細に指摘されている。残念なことに発掘調査による結果の検証はできない。しかし、上述のような記録から捉えた儒教による葬礼からは、墓所構造が水戸、池田両家のように馬鬣封形式、円墳という墳墓形式が特徴であったり、秋田夫人の墓碑形態<sup>(17)</sup>と浅見綱斎の「木主」との形態的共通性<sup>(18)</sup>(図9)、鶯峰と密接な交流のあった狩野探幽、木挽町狩野常信の墓碑<sup>(19)</sup>(図10)の形態の上部構造などの類似性などが指摘できる。いずれ



図12 尾張徳川家初代義直と殉職者墓

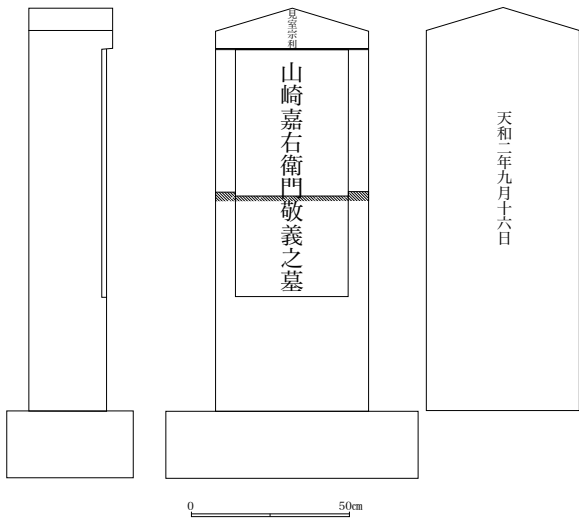


図13 山崎闇斎墓実測図（実査）

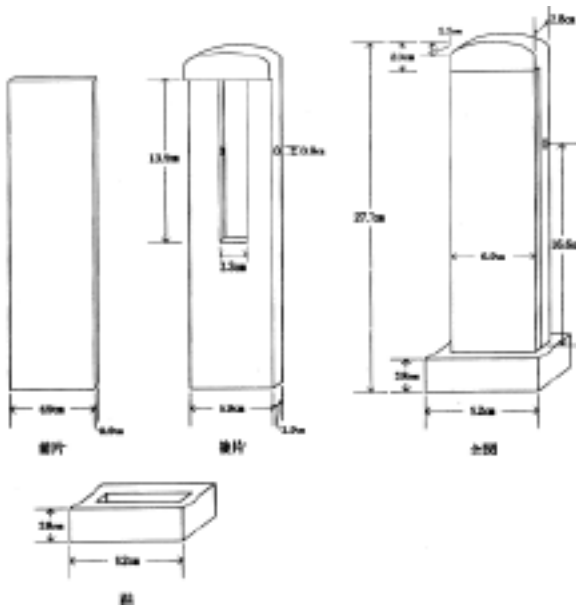


図15 程頤考案「木主」(註28)

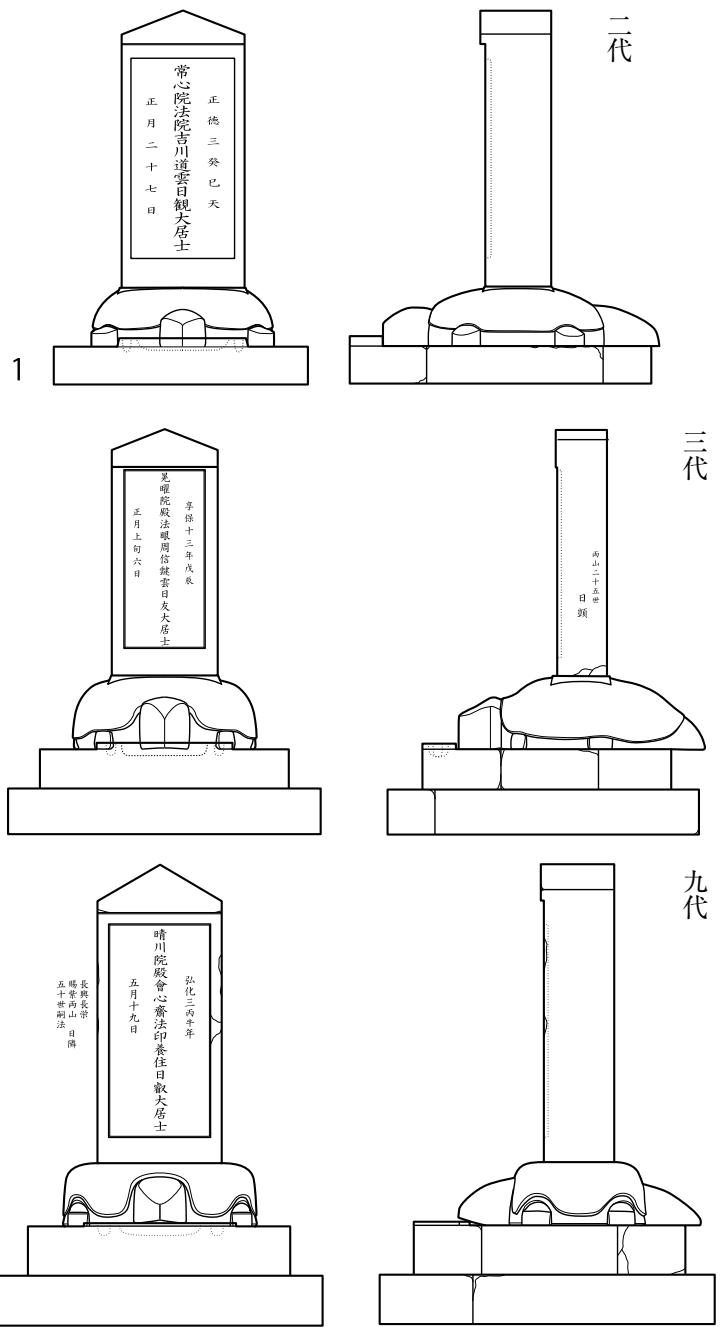


図14 木挽町狩野家三代の墓（池上本門寺-註27）

も火葬を嫌い仏事に拘らない葬礼が執行されていたが、供養儀礼においては仏事が営まれたことも幕府との関係において注意が必要である。一方で埋葬には係わらない寺院があって、寺墓地を「葬地」として広く門戸を開いた寺院の姿も浮かび上がり、近世の葬制を考える場合重要な事実関係であると言えよう。

これまで先学が指摘した17世紀代を中心とした代表的な大名墓所を垣間見てきたが、將軍家の葬送礼、幕府内における重要な主要大名の葬礼も儒教の影響が非常に大きいことが明確である。墓誌の埋納も儒

葬の影響下において中国古代の葬礼が取り入れられたことに端を發し特定の思想のもと葬礼が執り行われた可能性を示唆するものとして捉えておきたい。承応3年の後光明天皇の葬送儀礼執行においても、模擬の火葬儀礼は行なったものの、土葬へ回帰されたことの意味は、遺体の管理の問題からと指摘されてきたが当該期に仏教が排斥され儒教が広く流布していた状況下における火葬の否定として捉えられ、当時の潮流を端的に示す重要な事例と言えよう。

以上のように大名墓の成立過程の背景を儒教との係わりから考えたときに、庶民への影響も少ないことは明らかであろう。火葬を忌み嫌った儒教による土葬の普及もこれらのこととは無関係とはいえないと考えている。また、中世から伝統的に造られてきた塔形式の墓標が17世紀中葉から徐々にその造立数が減少する一方で、非塔形の墓標造立が爆発的に庶民間に広まることは、儒教を背景とする朱熹考案の「木主」<sup>(20)</sup>形態(図15)を取り入れた墓標化への考案があるように思われる。これを先導したのは林家を中心とした儒者であり、將軍に習うように儒教的な教えを規範とした臣従形態を取り込んだ大名の思想部分が社会全体に影響した可能性として捉えておきたい。

今後「王権」に限らず近世初期の葬制を考えるとき、葬礼としての儒葬が存在することは明確である。これまで、日本の近世期において儒教は広く浸透・定着しなかったという位置づけさえもされてきたが<sup>(21)</sup>、考古学的な視点からはむしろ家禮の喪礼——治葬を広く葬制規範としたことは明確である。この規範の流布の背景には、儒者ネットワークの存在することも明確である。

考古学における近世葬制研究は新たな段階を迎えつつある。儒教の実践については別稿で示した<sup>(22)</sup>。

## 引用・参考文献

- (1) 荒木敏夫『日本古代王権の研究』吉川弘文館 2006
- (2) 藤田 覚「近世王権論と天皇」(史学シンポジウム叢書 大津透編『王権を考える』山川出版社 2006)
- (3) 山本博文「徳川王権の成立と東アジア世界」(『王権のコスモロジー』弘文堂 1998)  
大口勇次郎「江戸の「王権」」(『史学雑誌』第112編3号 2003)
- (4) 註1と同じ
- (5) 伊藤信雄編『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』1975
- (6) 註1と同じ
- (7) 赤田光男「林下塔頭の葬祭儀礼について——特に大徳寺の諸相——」(『近畿民俗』50号 1970)  
玉村竹二「五山叢林の塔頭について」(『日本禅宗史論集』上 1988)
- (8) 水谷 類『廟墓ラントウと現世浄土の思想』雄山閣 2009
- (9) 吾妻重二「近世儒教祭祀儀礼と木主・位牌・——朱子『家礼』の一展開」(吾妻重二主編 国際シンポジウム『東アジア世界と儒教』2005)
- (10) 宮沢誠一「幕藩制期の天皇のイデオロギー的基盤」(北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』吉川弘文館 1978)
- (11) 野村 玄『日本近世国家の確立と天皇』清文堂出版 2006
- (12) 曾根原理『神君家康の誕生』吉川弘文館 2008
- (13) 小宮木代良『江戸幕府の日記と儀礼』吉川弘文館 2006
- (14) 近藤啓吾『儒葬と神葬』国書刊行会 1992
- (15) 吾妻重二「池田光政と儒教葬祭儀礼」(関西大学『東アジア文化交渉研究』創刊号 2007)
- (16) 常陸太田市教育委員会『水戸徳川家墓所』2007

- (17) 平尾道雄『野中兼山と其の時代』高知県文教協会刊 1970
- (18) 近藤啓吾『浅見綱斎の研究』神道史学会 1970
- (19) 坂詰秀一編『奥絵師江戸狩野家墓所の調査』2004
- (20) 註9と同じ
- (21) 土田健次郎「中国の礼と日本の作法」（『大倉山講演集』Ⅸ 財団法人大倉精神文化研究所 2001）
- (22) 松原典明「近世大名家喪禮実践の歴史的脈絡——儒教受容を中心に——」（『石造文化財』3 雄山閣 2011）

#### 挿図引用文献

- 図1 - (23) 津田三郎『秀吉の悲劇』PHP文庫 1989
- 図2 - (24) 港区教育委員会『台徳院霊廟の考古学』2009
- 図3 - (25) 伊藤信雄編『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』1975
- 図4 - (26) 常陸太田市内遺跡調査報告書『水戸徳川家墓所』2007
- 図14 - (27) 坂詰秀一編『奥絵師江戸狩野家墓所の調査』2004
- 図15 - (28) 註9と同じ

## 한국어 초록

### 근세 일본왕권의 묘제와 그 역사적 맥락

#### 마쓰바라 노리아키

본고는 일본 근세 ‘왕권’ 묘제의 그 역사적 계보와 전개를 고찰한 것이다. 특히 천황(天皇)가, 쇼군(將軍)가, 다이묘(大名)가 등의 지배자 계급에서 일본 고분시대 이후 다시 무덤 조영을 ‘상징’으로서 의식했다는 점에 대해, 무덤 규모, 구조, 그 변천, 종교, 사상 등을 통해 파악해 보고자 하였다. 우선 근세 천황가와 쇼군가 무덤의 규모를 비교, 검토하였다. 쇼군가의 묘제에서는, 쇼군을 모시는 ‘영묘(靈廟)’의 계보가 중세 선종(禪宗)의 개산당(開山堂), 소당(昭堂) 등에서 찾을 수 있음을 몇몇 사례를 통해 제시하였다. 또 쇼군을 중심으로 한 실질적인 권력 구조를 구성했던 다이묘 집안의 묘제에 대해, 그 변천과 조영의 배경사상, 종교, 정치적 관계를 고찰하였다. 그 결과 특히 근세 초기 다이묘 집안에서 묘소를 조영할 때는 『주자가례』의 장제를 따라 시신을 매장하였으나 훗날 그들을 모시는 제사는 불교식으로 이루어졌음을 지적하였다. 근세 초기 다이묘 집안 묘소 조영에서 유교가 수용된 한 단면을 선학들의 연구에 힘입어 밝혔다.